

Internship : The First Step's Review and the Next Approach (Social Science)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-07-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐藤, 猛 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/784

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



インターンシップ

—— 1 年目の取組みと 2 年目への展開 ——

佐 藤 猛

I. はじめに

本学は平成 14 年度より「インターンシップ」の授業を、正規の履修科目として開講した。平成 14 年春から準備をはじめ、平成 14 年 9 月から平成 15 年 1 月までの事前の学内講義を経て、平成 15 年 2 月から 3 月にかけて、12 名の学生がはじめて企業における就業体験を行った。

この講座は、本学においてはじめての取り組みであることから、マニュアル作りからスタートし、各種資料を参考にしながら、文書類の作成、帳票類の設計、実習受入れ企業の開拓、事前の学内講義の準備等々、試行錯誤の連続であった。このようにまったくの手作りのような状態で「インターンシップ」を実施したわけであるが、結果的には、実習に参加した学生諸君の真摯な努力と、快く実習学生を受入れていただいた各企業のご理解とご指導のお陰で、当初期待していた以上の成果をあげ得ることが出来た。

「インターンシップ」に参加した学生達が、何を学び、どのようなことを自分自身の今後の課題としてとらえたか、さらに実習受入れ企業による総合評価等については、「平成 14 年度インターンシップ実施報告」（平成 15 年 4 月）に詳述の通りである。

また、この 1 年目の成果をふまえて、2 年目以降の「インターンシップ」をどのように展開していくか。その手懸りをつかむ目的で、今春「インターンシップ」を体験した学生 12 名を対象として、実習から 5 ヶ月経過した

平成 15 年 7 月に、アンケート調査を実施した。

本稿では、1 年目の「インターンシップ」の実施経験と、参加学生のレポート、さらに参加学生を対象として行ったアンケート調査の結果も参考にして、今後、本学が目指す「インターンシップ」とは何かを考えてみたい。

Ⅱ. 平成 14 年度「インターンシップ」実施の概要

平成 14 年度に本学がはじめて取り組んだ「インターンシップ」の概要は、以下の通りである。

1. 「インターンシップ」履修学生

初年度の「インターンシップ」には、16 名の学生から履修仮申し込みがあり、その中から 13 名が履修することとなった。（内 1 名は実習直前に疾病入院したため実習を辞退し、企業実習は 12 名が体験した）

尚、「インターンシップ」履修の条件として、前期「実務家特講」の履修を義務付けている。

2. 「インターンシップ」受入れ企業

平成 14 年度「インターンシップ」の学生受入れを承諾していただいた企業は 13 社で、その中から学生の希望、通勤距離等勘案して、次の 10 社に実習を受入れていただいた。

（事務系）

- ① 曙エンジニアリング株式会社（機械設備、金型製造業）
- ② カシュー株式会社（塗料、樹脂製造業）
- ③ 株式会社熊谷組（総合建設業）
- ④ 大和産業株式会社（自動車部品商社）
- ⑤ 橋本産業株式会社（機械設備部品商社）

⑥ 株式会社フコク（ゴム製品製造業）

（販売・接客系）

① 株式会社オンワード樫山（衣料品販売業）

② 株式会社カジワラキッチンサプライ（厨房機器販売業）

③ 株式会社そごう川口店（百貨店）

④ 有限会社山口屋（パン・ケーキ製造販売業，レストラン）

「インターンシップ」の学生受入れ企業の開拓は，平成14年春から開始した。本学の卒業生を数多く雇用していただいている企業84社に，学生の実習受入れを依頼する文書を発送し，検討をお願いした。この活動で学生の受入れを承諾していただいた企業は，4社であった。残りの9社は担当教員である筆者の知己の企業に働きかけ，受入れを承諾していただいたものである。

尚，埼玉県インターンシップ，東京都インターンシップ，経団連インターンシップ等「インターンシップ」の紹介を行っている公的機関については，特に利用しなかった。

3. 事前の学内講義

「インターンシップ」実習に先立ち，実習に出向く学生の企業における基礎的知識を教育するため，下記のような事前の学内講義を行った。

- ① 「インターンシップ」とは
- ② 実習受入れ可能企業の研究
- ③ 会社とは。会社における働くルール
- ④ 会社の一日の流れ。会社で使われる帳票類
- ⑤ 職場におけるあいさつ。電話対応
- ⑥ アポイントメントをとる電話会話。企業訪問のマナー
- ⑦ 履歴書の書き方。志望動機のまとめ方
- ⑧ お礼状の書き方
- ⑨ 出勤から退勤までの職場における心構え

⑩ 実習日誌について

4. 「インターンシップ」実施中及び実施後のフォロー

実際に学生が「インターンシップ」を実施している期間中に、担当教員が職場を訪問し、実習状況を確認した。併せて、実習先企業に「実習評価」を依頼した。

「インターンシップ」終了後、参加学生から「実習日誌」の提出を受けるとともに、実習参加者全員で、「実習体験報告発表会」を行った。

また、担当教員は、「実習体験報告発表会」終了後、各受入れ企業に「実習日誌」の写しを持参し、実習のお礼報告を行い、次年度以降の協力を依頼した。

Ⅲ. 「インターンシップ」体験学生に対するアンケート

(調査の方法)

平成14年度「インターンシップ」に参加した学生12名を対象として、「インターンシップ」終了後5ヶ月が経過した平成15年7月に実施した。調査方法は、質問用紙を12名に配布し、無記名で回答を求め、12名全員から回答があった。

「インターンシップ」を受講した皆さん

皆さんが履修した「インターンシップ」が終了して3ヶ月以上がたちました。皆さんが取り組んだ1年目の「インターンシップ」は、皆さんの努力と実習先企業のご協力により大成功だったと思います。

今、秋から始まる2年目の「インターンシップ」講座の準備に取り掛かっています。1年目の実績をふまえて、2年目以降をより充実した授業にしたいと考えており、実習に参加した皆さんの忌憚のない意見を聞かせてください。

1. 「インターンシップ」について

1.1 「インターンシップ」を履修した理由

「インターンシップ」を履修した理由は、「「実務家特講」の授業で説明を聞いて」7名、「先生にすすめられて」5名が上位で、1年目ということもあって、「先輩にすすめられて」「友人にすすめられて」という回答はゼロであった。その他と回答した理由は、「自分のためにインターンシップを体験しておきたかった」ためである。

1.1 あなたが「インターンシップ」を履修した理由は何ですか
(複数回答)

(1) 「講義・演習概要」を見て	3
(2) 「実務家特講」の授業で説明を聞いて	7
(3) 先生にすすめられて	5
(4) 先輩にすすめられて	0
(5) 友人にすすめられて	0
(6) その他	1

1.2 「インターンシップ」を履修してどう感じたか

「インターンシップ」を履修した結果の評価を求めたところ、9名が「履修して大変良かった」、3名が「履修して良かった」と回答しており、全員が若干の差はあるものの履修して良かったと感じている。

1.2 「インターンシップ」を履修してどう感じましたか

(1) 履修して大変良かった	9
(2) 履修して良かった	3
(3) どちらともいえない	0
(4) 履修して良くなかった	0
(5) 履修してまったく良くなかった	0

(1)(2)と回答した人は、どういう点が良かったか具体的に記入して下さい。という設問に対して

- * 「アルバイトと違った責任感を感じられたことと、2週間だけ社会人として自覚がもてたから」
- * 「実際社会に出て、自分の未熟さを知った」
- * 「自分自身の良い経験になった」
- * 「就職活動をするときの強みと、自分にはどんな仕事に向いているかわかった」
- * 「就職にもつながるし、今後絶対役に立つ」
- * 「社会のことについて、どういったことをしているかなどわかった」
- * 「実際の会社の雰囲気がわかり、自分の適性が判断できたので」
- * 「就職意欲が高まった」
- * 「担当してくださった方と出会えて良かった」
- * 「自分に何の職種が合っているかわかった」
- * 「実際に企業に行き、会社とはどういうものか感じる事ができた」
- * 「事務というのを体験できて良かった」
- * 「学生生活で少し時間の面でルーズになっていたけど、「インターンシップ」で研修に行って、社会人になるにはこれではいけないと思うことができた。(5分前行動ではなく、10分前行動等)」
- * 「職場の先輩の就職活動の仕方や、就職歴が豊富な先輩がいたので、いろいろな職種の良い点、悪い点を聞くことができた」
- * 「売り場が広がったので、大きな声が出せるようになった。(就職試験の面接のときに、声が大きくて良いと言われたので良かった)」

1.3 今後の「インターンシップ」について

「インターンシップ」の授業を今後も続けたほうが良いか、やめた方が良いかとの設問に対して、全員が今後も「インターンシップ」を続けてほしいと回答している。これは、初年度の「インターンシップ」に参加した

全員が、就業体験を通じて貴重な経験をしたことを表している。

1.3 今後の「インターンシップ」の授業について

(1) 「インターンシップ」は続けてほしい	12
(2) どちらともいえない	0
(3) 「インターンシップ」は必要ない	0

2. 職業観や就職への影響について

2.1 「インターンシップ」を履修して職業観に変化はあったか

「インターンシップ」を履修して職業観に変化はあったかという設問に対して、「職業観はとても変った」から「まったく変らない」まで回答が分散した。職業観への影響は、分野別には事務系を希望していた学生にはあまり影響がなく、反面、販売・接客系を希望していた学生は、「やはり私は販売職だ」と結論づけたグループと、「今まで考えていた販売職と現実には大きな乖離がある」と、これまでの希望職種を見直ししたグループに二分された。その結果がこの回答に反映されている。

2.1 「インターンシップ」を履修してあなたの職業観に変化はありましたか

(1) 職業観がとても変った	2
(2) 職業観が変った	3
(3) どちらともいえない	4
(4) 職業観はあまり変らない	2
(5) 職業観はまったく変らない	1

(1)(2)と回答した人は、職業観がどのように変ったのか具体的に記入して下さいという設問に対して

- * 「自分はあらためてこの職業だと思った」
- * 「アルバイトと正社員の差がわかった」

- * 「自分の知らない職業がたくさんあることがわかった」
- * 「いろんな職種，たくさんの会社があることがわかったから，いろいろ調べてみた。それにより自分が何にむいているかわかった」
- * 「事務か販売かで迷っていたので，「インターンシップ」に参加しました。その結果，販売は良いところ（見た目かっこいい）しか今まで見えていないことに気がつきました」

2.2 「インターンシップ」の就職活動への影響について

「インターンシップ」を履修したことにより，就職活動に影響を与えたかという設問に対して，12名中9名が「とても影響を与えた」「影響を与えた」と回答している。実際に各企業で職場生活を体験したことにより，自分自身を見つめ直す機会となり，今後どのような方向に進んでいけば良いかをそれぞれに把握して，業種，職種の選定に役立てているようである。また，「就職活動に早くから取り組むきっかけとなった」という回答もあった。

2.2 「インターンシップ」はあなたの就職活動に影響を与えましたか

(1) 就職活動にとても影響を与えた	5
(2) 就職活動に影響を与えた	4
(3) どちらともいえない	3
(4) 就職活動にあまり影響を与えなかった	0
(5) 就職活動にまったく影響を与えなかった	0

(1)(2)と回答した人は，就職活動にどのような影響があったか具体的に記入して下さい。という設問に対して

- * 「面接のときに，自分の体験を話すことが出来た」
- * 「事務職一本」
- * 「接客業をやってみて，自分はデスクワークにむいていると気づく

ことができたから」

- * 「友達の話を聞いたりして、事務でも様々な仕事があると知ることができた」
- * 「幅広い分野の仕事に興味を持てるようになった」
- * 「いろいろな仕事を調べるようになった」
- * 「早くから就職活動にとりかかった」
- * 「「インターンシップ」先のような企業に就職したいと思って、業種が定まった」
- * 「職場の先輩の話を聞いて、少しでもあきらめてはいけない。何社も落ちているけど、今も頑張っています」

3. 実習先について

3.1 実習先の選択について

初年度13名の「インターンシップ」履修学生に対して、用意できた実習先は、事務系7社、販売・接客系6社のあわせて13社であった。「インターンシップ」を履修した学生は、この13社について会社研究を行って、自分の実習希望先を選択し、担当教員とのヒアリングの結果、実習先を決定した。初年度は、事務系希望7名が6社に、販売・接客系希望6名が4社で実習することになった。

実習先の選択について、半数の6名が「実習先の選択に困らなかった」と回答しているが、残りの6名は「どちらともいえない」「実習先の選択に困った」と回答している。

3.1 実習先の選択について

(1) 実習先の選択に困らなかった	6
(2) どちらともいえない	5
(3) 実習先の選択に困った	1

3.2 実習先について

「実習先をもっと増やしてほしい」「どちらともいえない」との回答が、あわせて11名あり、履修学生はもっと広範な選択肢を望んでいる。また、新たに増やしてほしい業種として、商社、金融、アパレル系等があげられている。この中で金融業については、守秘義務の関係から受入れていないと回答する企業がほとんどであり、今後も「インターンシップ」の実習先としては、きわめて難しい業種といえる。

実習先の確保については、実習受入れ企業と学校の関係ばかりでなく、企業の経営方針や規模、業種、ロケーション等の関係から、なかなか難しいのが実情である。しかし、実習先をしっかりと準備できなければ、「インターンシップ」の講座そのものが成立しないわけで、実習先確保について不断の努力を続けていかなければならない。これは、単に実習先を増やす努力をするだけでなく、一度実習を受入れていただいた企業と継続して関係を維持していく努力も、また必要となってくる。

2年目の平成15年度は、履修希望学生が倍増したこともあって、実習受入れ企業の増加に取り組んだ結果、9月時点で初年度受入れ可能となった13社に加え新たに11社から学生の受入れを承諾していただき、事務系14社、販売・接客系10社の中から、学生が希望先を選択することとなっている。

3.2 実習先についてどう思いますか

(1) 実習先をもっと増やしてほしい	8
(2) どちらともいえない	3
(3) 実習先は今のままで良い	1

(1)と回答した人は、どの分野の実習先を増やしてほしいのか具体的に記入して下さい。との設問に対して

* 「商社」

* 「金融」

- * 「事務系」(3名)
- * 「アパレル」(3名)
- * 「販売系」(2名)

3.3 実習先までの通勤時間について

自宅から実習先までの通勤時間については、最長 90 分、最短 20 分、平均 66 分であった。実習先の選択肢が少なかったことの影響がこの面に出ており、通勤時間 90 分という学生が 5 名いた。今後、実習先を開拓する際、学生の居住分布をより把握して、もう少し自宅からの通勤時間を短縮する方向も検討する必要があるかも知れない。

3.3 自宅から実習先までの通勤時間はとれくらいかかりましたか

自宅から会社まで	90 分	5
	70 分	1
	60 分	3
	40 分	1
	30 分	1
	20 分	1

4. 実習期間について

4.1 「インターンシップ」の実習期間

初年度の「インターンシップ」の実習期間は、最長 12 日間、最短 4 日間、平均 7.4 日間であった。最短 4 日間については、実習中に実習学生の身内にご不幸があり、実習先とも話し合いの結果、当初の予定を変更して実習を打ち切ったものである。

4.1 「インターンシップ」の実習期間は何日間でしたか

12 日間	1
9 日間	5
8 日間	1
5 日間	4
4 日間	1

4.2 実習期間についてどう思うか

実習期間については、4～12 日間のバラツキがあったものの、回答した全員が「ちょうど良い」と回答している。「インターンシップ」の教育効果を考えると、2 週間（10 日間）くらいが適当と考えているが、実習受入れ企業側の要請で、1 週間（5 日間）とせざるを得ないところもあり、当面、原則として2 週間（ただし、受入れ企業の都合により、最低1 週間）としていきたい。ただ、1 週間であっても、2 週間であっても、学生に対するインパクトには、それほど大きな差となってあらわれていない。

4.2 実習期間についてどう思いますか

(1) 実習期間が長すぎる	0
(2) ちょうどよい	12
(3) 実習期間が短すぎる	0

実習期間は何日くらいが良いか記入して下さい。という設問に対して

- * 「2 週間」（2 名）
- * 「どの会社も1 週間くらいが良い」
- * 「1～2 週間（5 日くらいだと短いと思う）」
- * 「1 週間」

5. 実習内容について

5.1 実習先での実習内容についてどう思うか

実習先が販売・接客系の場合、全員が半日乃至1日の事前研修の後、即戦力として店頭に立って販売業務を行っている。他方、事務系は各受入れ企業の事情で、様々な形で実習が行われた。伝票類のインプット業務のように、ルーティンワークに取り組んだケース（商社，製造業）。企業の採用活動のアシスタントとして、学校訪問や会社説明を行ったケース（商社）。工事現場の見学が取り入れられたケース（建設業）。新入社員教育のように、各部門の業務内容のレクチャーが中心だったケース（機械設備業）等である。一概にどの実習のやり方が望ましいか判断が難しいところだが、初年度に実務の割合が少なかった企業に対しては、実務の比率を増加させて頂くよう要請している。

5.1 実習先の実習内容についてどう思いますか

(1) 実習の内容にとっても満足している	6
(2) 実習の内容に満足している	4
(3) どちらともいえない	2
(4) 実習の内容に不満がある	0
(5) 実習の内容にとっても不満がある	0

(4)(5)と回答した人は、どういう点に不満があるのか具体的に記入して下さい。という設問に対して

* 「雑用は雑用で良かったのだけれど、欲を言えばどういう仕事内容かをもっと説明していただければ良かったです」（回答は(3)）

5.2 実習内容について、今後実施したほうが良いと思うことがあれば、具体的に記入して下さい

という設問に対して

* 「もっと仕事をしたかった」

5.3 実習内容について、今後必要ないと思うことがあれば、具体的に記入して下さい

という設問に対しては回答はなかった。

6. 事前の学内講義について

6.1 事前の学内講義は役に立ったか

「インターンシップ」は単に企業において就業体験をするだけでなく、社会人とはどういう人が望まれているのか、事前にしっかりした準備教育を行う必要があると考えている。そのため、Ⅱ.3項で明らかにした事前の学内講義や電話のかけ方の演習、さらに履歴書の書き方、志望動機のまとめ方、お礼状の書き方等について、実地に添削、指導も行った。

この事前の学内講義について11名が、「とても役に立った」「役に立った」と回答している。

6.1 事前の学内講義は役に立ちましたか

(1) 事前の学内講義はとても役に立った	4
(2) 事前の学内講義は役に立った	7
(3) どちらともいえない	1
(4) 事前の学内講義は役に立たなかった	0
(5) 事前学内講義はまったく役に立たなかった	0

6.2 事前の学内講義で役に立ったことは何か

事前の学内講義で役に立ったのは、「お礼状の書き方」「実習生の態度」「あいさつの仕方」等が多く回答され、逆に役に立たなかったことは「一日の仕事の流れ」「電話対応の仕方」があげられている。役に立たなかったとの回答は、販売・接客系で実習した場合で、実際の職場での勤務形態

が、標準的な「一日の仕事の流れ」と異なっていたり、職場で電話対応の機会がなかったりしたため「役に立たなかった」との回答になったものと思われる。学生のコメントでは、「リニューアルオープンなどで、毎日の仕事の流れが違ったりしたので、「一日の仕事の流れ」は役に立たなかった」というケースがあげられている。

6.2 事前の学内講義で役に立ったのはどんなことですか（役に立ったものには○，役に立たなかったものには× 複数回答可）

	○	×
(1) 一日の仕事の流れ	5	4
(2) 実習生の態度	8	0
(3) 電話対応の仕方	4	3
(4) お礼状の書き方	10	0
(5) あいさつの仕方	8	0
(6) その他	0	0

6.3 今後の事前の学内講義について

今後の事前の学内講義について、更に充実してほしいものを尋ねたところ、「言葉遣い」をあげた者が一番多かった。実際に職場に出てみると、敬語の使い方がうまく出来なかったり、敬語と謙譲語の使い分けが出来なかったり、頭の中で理解していたとしても、現場に出るとうまく使えないというレポートが何人かから提出されている。

2年目の「インターンシップ」の事前の学内講義では、この部分をどう取り入れていくか研究の必要性を感じている。

6.3 事前学内講義の内容について更に充実してほしいのは何ですか（複数回答可）

- | | |
|--------------|---|
| (1) 一日の仕事の流れ | 1 |
|--------------|---|

(2) 実習生の態度	2
(3) 電話対応の仕方	2
(4) お礼状の書き方	6
(5) あいさつの仕方	3
(6) 言葉遣い	7
(7) その他	0

6.4 事前の学内講義の回数について

初年度は事前の学内講義を延べ8回行った。この事前の学内講義の回数について質問したところ、「もっと増やしてほしい」と回答した者が2名あり、逆に「もっと減らしてほしい」との回答はゼロで、学生の積極性を表している。

また、「「インターンシップ」に関係なく、もっといろいろな会社を知りたい」「新入社員についての話をしてほしい」という要望もあり、より充実した事前の学内講義を展開していかなければならないと感じている。

6.4 事前の学内講義の回数についてどう思いますか

(1) 事前の学内講義の回数をもっと増やしてほしい	2
(2) 今のままで良い	10
(3) 事前の学内講義の回数をもっと減らしてほしい	0

(1)(3)と回答した人は、具体的にどうしてほしいのか記入して下さい。
という設問に対して

- * 「プリントが多かったので、もう少し減らして、お礼状の練習などをするのも良いと思いました」
- * 「実際に先生が勤めていた時の、新入社員の印象などを話していただければ良かったと思います」
- * 「もう少しいろんな企業について教えてほしい。「インターンシップ」

の企業とは関係なく知りたいです」

7. 最後に「インターンシップ」について、意見や希望があれば何でも記入して下さい

という設問に対して

- * 「交通費がちょっと痛かったですが、良い経験をしたと思っています。これからも「インターンシップ」を是非続けていって下さい」
- * 「「インターンシップ」に参加して、会社の仕組みなどを知ることが出来たのでとても良かったです。自分の今後について、考え直す良いきっかけとなりました。また、色々な方々のお話を聞くことが出来たので、とてもためになりました。もう少し事務の仕事をやってみたかったです」
- * 「「インターンシップ」へ行く前の事前訪問後や、「インターンシップ」後のお礼状を書くこと、履歴書を書くこと、相手先にアポイントメントの電話をすることなどは、就職活動の時など大変役に立つと思います」
- * 「行く企業の写真などを事前に見てみたい」
- * 「就職につながる企業が沢山あってほしい」
- * 「一年生が「インターンシップ」は就職につながるというような考えだけになっているようなので、「インターンシップ」の本当の狙い（自分の適性を知ることや、会社の仕組みを知ることなど）をきちんと分かってもらったほうが良いと思う。就職につながることもあるが、それはあくまで別のことだと思う」
- * 「もっと沢山の生徒が履修できれば良いと思います」
- * 「「インターンシップ」は進路を販売にするか、事務にするか迷っている人には是非行ってほしいです。仕事とは？？っていうのではなく、自分にはこの職種が合っているか？という気持ちでやってほしいです」

- * 「秘書の授業をとっていても、やはり敬語は難しいので、少し勉強した方が良かったと思います。あいさつや自己紹介のタイミングなどの練習もやった方がより良くなると思います」
- * 「私は事務をやらせていただき、販売の方にも興味を持ちましたが、やはり今となっては事務の方が自分に向いていると確信しました。少し興味を持っているだけでは仕事をしていくのは難しいと思うので、「インターンシップ」は自分に合っていることを見つけることができたので、良い経験ができたと思います」
- * 「販売と事務の両方に「インターンシップ」で行けたら良かったと思います」
- * 「短大ではまだやっているところが少ないと思うので、これからも続けてほしいと思います」
- * 「普通の販売員の人めったに経験できないような、リニューアルオープン、改装のお手伝いができ、お店の裏側を見ることができたので楽しかったです」
- * 「「インターンシップ」で学んだことを、就職活動や社会人生活に活かしたいと思います」
- * 「「インターンシップ」に行って仕事場の雰囲気が分かり、今の自分にとっても責任感がないことが分かりました。なので一年生にも沢山行ってほしいと思います。とても良い勉強になりました。ありがとうございました」

8. 初年度の「インターンシップ」に参加した学生に対するアンケートのまとめ

初年度の「インターンシップ」に参加した学生に対するアンケートの結果は、これまでに詳述した通りである。アンケートの設問の仕方にもまだまだ改良しなければならない点もあるが、「インターンシップ」を体験した学生の意見をまとめてみると、概ね以下のようなになる。

- (1) 「インターンシップ」に参加してよかった。
- (2) 各自の職業観や就職活動に大きなインパクトを与えた。
- (3) 実際に就業体験をしたことにより、普段の授業の重要性を再確認した。
- (4) 受入れ企業については、もっと選択肢を広げてほしい。
- (5) 事前の学内講義は役に立ったが、更にその内容を充実してほしい。

IV. 「インターンシップ」と就職の関係

「インターンシップ」と就職の関係については、基本的に企業実習イコールその企業への就職とは考えていない。現実採用計画がないにもかかわらず、実習生を受入れていただいている企業すらある。「インターンシップ」はあくまでも、実習生が就業体験をすることにより、自らの社会観、職業観の形成に資することが、その大きな目的と考えているからである。

各企業の経営者、人事担当者との事前打ち合わせでも、「実習イコール就職ではない」というコンセンサスが出来あがっていた。その中で、もし、企業が実習生の実習ぶりを評価して、その実習生の受入れを希望し、実習生本人もその企業への就職を希望するケースがあれば、本人、企業、学校にとってきわめて望ましい、いわば「三方一両得」の結果になることも、事前の打ち合わせの中では話題にのぼっていた。

実習イコール実習先企業への就職という結果は、「インターンシップ」のいわば副産物であって、この結果ばかりを期待してはいけない。

今回の初めての「インターンシップ」では、三つのケースでこの副産物が発生した。

ケース1：販売系の実習先企業から、是非実習生を採用したいとの申し出があり、実習生本人もその企業への就職を希望したところから、4月上旬にはその企業への就職が内定した。

ケース2：事務系の実習先企業から、ケース1と同様に実習生を採用し

たいとの申し出があった。しかし、実習生本人の希望職種と異なっていたため、本人から辞退の申し出があり、その企業への就職はお断りした。

ケース3：事務系の実習先企業から、「インターンシップ」終了後1ヶ月が経過した3月後半になって、急遽欠員補充をしたいので、学生を推薦してほしいとの連絡があった。その企業とはこれまで卒業生の就職とは無縁であったが、「インターンシップ」がきっかけとなって、1名の就職が決定した。

このように「インターンシップ」イコール就職ではないといっても、学生の就職に様々な面で効果があることも事実である。今後も「インターンシップ」の実績を積み重ねることによって、このような副産物がさらに増加することを期待している。

V. 「インターンシップ」受入れ企業の事情とメリット

「インターンシップ」の目的は、学生が在学中に就業体験をすることによって、それぞれの職業観を涵養し、就職活動への一助とすると共に、残りの学生生活をより充実したものにする糸口をつかむためのものと考えている。しかし、これはあくまでも実習生を送り出す学校側、学生側の論理であって、実習生を受入れる企業にとって何がポイントなのかを併せ考える必要がある。

筆者の40年あまりの実務経験からいっても、企業にとって実習生の受入れは、受入れのための事前の社内調整、カリキュラムの準備や、受入れ時の教育、実習中の指導やフォロー等、計数化出来ない労力の負担と、場合によっては金銭的な負担が発生する。そのため、実習生受入れを要請しても、「「インターンシップ」を実施したことがない」「「インターンシップ」のカリキュラムが組めない」「業務が繁忙で実習生を受入れるのは無理」「守秘義務の関係で実習生は受入れていない」「実習生を受入れても満足な

指導が出来ない」等々の理由から、本学のケースでもこれまでに受入れを要請した約120社の内、80%以上の企業から受入れ不可の回答となっているのが現実である。

日本能率協会が経済産業省関東経済産業局の「インターンシップ」事業に参加した企業115社を対象とした調査では、企業の導入目的は「社会への貢献」が77%と最多で、以下「企業のPR」が51%、「新卒採用への期待」と回答した企業は34%だった。企業にとって「インターンシップ」受入れのメリットは、「社会への貢献」「企業のPR」といった抽象的な項目が上位を占めている。直接的な効果として「新卒採用の期待」をあげた企業があるが、これは主に外食産業、衣料品販売業といった流通関連企業と、実習期間中、よりきめ細かく観察することによって、通常の採用活動では得られない、適正な人材確保の手段として位置付けている企業に見られる現象である。

実際に「インターンシップ」を実施して、受入れ企業で学生を指導した担当者のコメントで注目したいのは、実習生を受入れたことによって、実習生が受入れ職場のメンバーに様々なインパクトを与えているという報告があることである。

「「インターンシップ」を実施して、売り場メンバーも大きな影響を受け、販売に対する意欲や明るさなど見習う点が多い。交流することにより、お互いに現状を把握し、良い影響を受けるシステムに私は賛同します」（株式会社そごう川口店婦人雑貨係長石谷雄玉氏）

更に、実習生の指導を、入社1年目の社員に担当させた企業や、職場毎の業務説明をそれぞれの職場の女子社員に担当させ、普段「教わる」立場の社員を、「教える」立場につかせることによって、社員教育の一環としてとらえている企業もある。

このように「インターンシップ」を実施することによって、在籍社員に何らかのインパクトを与えることも、企業にとって重要なメリットといえるのではないだろうか。実習生を送り出す側が考えなければならないのは、

単に学生の就業体験をサポートするだけでなく、日頃から受入れ企業の人事担当者との意見交換を密にすることによって、学生、企業、学校それぞれがメリットを見出していくことが求められている。さらに、受入れ企業の事情と、実習をする学生の適性と希望を考慮した人選をする必要も、また重要なポイントとなる。

VI. おわりに ―― 本学が目指す「インターンシップ」とは

1. 「インターンシップ」の現状

現在、大学、短期大学はもとより、高等学校、中学校さらには公務員や教員を対象とした「インターンシップ」は、平成9年に文部科学省、厚生労働省、経済産業省が推進の考え方をまとめたことにより、その普及が加速した。平成13年度の文部科学省の調査によれば、全国670大学のうち、授業科目として単位を認定した大学は281校（前年度比63校増）にのぼっている。

埼玉県内においても、約30校の大学、短期大学が何らかの形で「インターンシップ」に取り組んでいる。しかし、その取り組み方をみると、そのほとんどが就職部（課）、キャリアセンターといった学生の就職担当部門が主管しており、教員が積極的に関与していると思われるのは、わずかな数校にすぎない。

就職担当部門が主管しているケースでも、教員が積極的に関与しているケースでも、学生が在学中に就業体験をすることによって、より明確な職業観を持ち、将来の方向付けを考えさせようという「インターンシップ」本来の目的に大きな違いはない。しかし、実際の運用を見ると、就職担当部門主導の場合、多くは「インターンシップ」実施機関（例えば、都道府県インターンシップ、経団連インターンシップ等）の情報を「インターンシップ」希望学生に提供し、受入れ企業との橋渡しを主に行っているケースを散見する。また、「インターンシップ」実施後のフォロー不足により、

受入れ企業が次年度以降の受入れに否定的になったり、学生の希望と受入れ企業の用意したプログラムのミスマッチから、ほとんど実習効果が得られなかったケース、さらに、「インターンシップ」紹介業者を通じて実習に行ったところ、受入れ側は単なるアルバイトとしか考えていなかったケースなど、様々なトラブルが発生している事実もある。

折角「インターンシップ」を実施するのだから、より効果のあがる方法と取り組みを考えなくてはならない。

2. 「インターンシップ」の実施効果と2年目以降の取り組み

「インターンシップ」の履修学生に対しての実施効果は、次のように考えている。

- ① 「インターンシップ」履修学生の職業観の確立
- ② 就職活動意欲の向上
- ③ 「インターンシップ」実施前後の学業への取り組み意識の改善
- ④ 将来の方向付けを考えるきっかけを作る
- ⑤ その他

これらの目的を達成するために、2年目以降に取り組まなければならないのは

- ① 積極的に「インターンシップ」に取り組む学生の選択
- ② 事前の学内講義の充実
- ③ 「インターンシップ」についての教員間の意識の共有化
- ④ 受入れ企業の拡大
- ⑤ 受入れ企業の経営者、人事担当者との綿密なコンタクトにより、実習プログラムの充実と企業メリットの追及 等々である。

いずれにしても、より効果的に「インターンシップ」を運用し、参加学生に最大限のメリットをもたらすために、担当教員が中心となって、よりきめの細かい準備と実行が、このプログラム成功の鍵といえるのではないだろうか。

3. 本学が目指す「インターンシップ」とは

本学が目指す「インターンシップ」とは、本学が小規模校である利点を最大限に生かして、学生一人一人に見合った事前の学内講義と、実習先の選択を行うことにある。そのために、事前の学内講義を更に充実させて、実習学生の実習に取り組む意識の向上とそれに見合う知識、技能の準備を行う必要がある。また、担当教員が中心になって、本学独自で受入れ企業の拡大（特にバラエティーに富んだ業種と職種を選択が出来る体制の確保）を行うことも重要である。さらに、受入れ企業の経営者、人事担当者との綿密なコンタクトにより、企業、学校双方にメリットのある「インターンシップ」を追及していかなければならない。

また、将来の展望としては、より地元に着した形での「インターンシップ」を展開する必要があるのではないかと考えている。現在のところ、地元への受入れ要請を積極的に行っていないこともあって、初年度は地元での受入れ企業はわずか1社にとどまっている。これからより地元を重視し、産学連携をはかっていかなければならない点及び学生の通勤可能範囲を考えあわせ、地元公共団体、商工業団体、各企業へ、本学学生の「インターンシップ」受入れを積極的に働きかけていく必要がある。

参考文献

- 1) Job@Forum 編集部編「インターンシップ」学生援護会，2000 年
- 2) 文部科学省「インターンシップ・ガイドブック インターンシップの円滑な導入と運用のために」ぎょうせい，平成 14 年
- 3) 古田博美編著「インターンシップ 職業教育の理論と実践」学文社，2001 年
- 4) 埼玉大学経済学部インターンシップ実行委員会編集「埼玉大学経済学部インターンシップ計画・実施・評価・報告 2001 年版」埼玉大学経済学部インターンシップ実行委員会，2002 年
- 5) 日本インターンシップ学会「年報 No.6 2003 年版（平成 15 年）」日本インターンシップ学会，2003 年